



# 町民文芸

## 只見短歌会

八月詠草

大塚栄一

指導

関谷登美子

漸くに日ざし傾き肩越しに初秋の風吹き入りてくる

古川 英子

極まれる暑さに耐へて書きをればみんみん蟬の声に疲るる

馬場 八智

猛暑日の続きで乾く裏庭に秋海棠は花咲かせたり

新国由紀子

研ぐ暇もなく切れわるき包丁に思はず右の指を傷つく

小倉キミ子

雷鳴と大粒の雨に煙る野の鳥は鳴きやみ身を潜むらし

渡部ゆき子

従弟妹らの新盆迎ふると割りし松焚きつつ高き灯籠見上ぐ

目黒 富子

時経ちて色の褪せゆくふぢばかまの向き変へやれば趣の出づ

渡部ヨリ子

お茶を飲む時間も惜しく動きみて見なれし眺めにふと目をとめる

新国 洋子

暫くはリフォームのためこの部屋より出れぬと娘は食事を運ぶ

(出詠順)

## 只見俳句会

九月例会

目黒十一

指導

修一

盆終わり時計の針は日常に

夏の海一直線に切るボート

一穂

花売り女庭の庭園誉めて行き

宝拾う老若男女運動会

敦子

道行くや山百合の香のいずこより

恒夫

墓詣帰りの道は無言にて

吉児

礼

目の限り野山の錦朝日光

球飛ぶや日毎色づく秋の芝

邦男

順子

眼前にひろがる田の面雲の峰

遠いほど思い出される蓮の花

リウコ

あかあかと村じゅう灯る盂蘭盆会

盆路を刈りいくたびか振り返る